
虹色スクランブル

能勢恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色スクランブル

【Nコード】

N4724Z

【作者名】

能勢恭介

【あらすじ】

対米戦を経験しなかった日本は、樺太でソ連と対峙していた。おりしも共産主義者たちによる国家革命計画が背後に潜む中、「国家公安機構」所属の竹之内は、ある組織が不穏な動きを見せていることに気付く。

急速な経済発展を続ける日本……北海道・札幌市。

1960年代は混んとしていた。

――第三恭順区へ行く。

内2（内務第2課）の事務室は、国鉄札幌駅を間近に望むビルの一室にある。折しも札幌オリピック開催が決定し、街は好況に沸き、雪解けの薄汚れた舗道に行く市民の足取りが軽いのは、新しい季節が巡ってきたからだけではなかった。しかし、竹之内宏行の心は晴れないままだった。

「是永教授の自宅は」

内2課長は道警からの出向扱い。監視役、お目付、あるいは重し。様々なあだ名を戴き、しかし北大卒の渡部は、歴代の課長としてはもつとも頭が切れると噂されていた。

「特機が張っています。我々の出る幕ではないようです」

「お前、真駒内に戻りたいんじゃないのか」

渡部は、竹之内の前職のことを揶揄しているのだ。内2課に「飛ばされる」前は、真駒内町の道警機動隊に所属していたからだ。

「それは言わんで下さい。約束のはずです。ここでは前歴は問わないと」

「そうだったかもしれん」

両切りピースを軽くデスクの上で弾ませながら、渡部は笑った。

「経済学部はアカの巣窟だそうだ」

誰に言うともなく、渡部はピースに火を点け、呟く。

「是永が筆頭だど？」

「違うと思うか」

「俺は、イデオロギーは、よくわかりません」

「海軍の空母が、いま小樽に入港してる。その最中を狙って、『解放戦線』の連中、モロゾフカクテルを散々積み上げてるんだ」

ナパームジェリーを贅沢に使った火炎瓶のことだ。出勤服に付着

して着火すれば、そうそう優しく消えてはくれない。真駒内での模擬訓練で受けた火傷の痛みは忘れられない。

「連中、石狩新港建設反対とか、そんなことも言っていましたね」

「軍港化されるんだって、そういう主張だそうだ。要するに、お上には楯突いておけ、そういう魂胆さ。ゴネればどこかに金が落ちるのさ」

国家公務員崩れ。キャリアのなり損ね。地方公務員上級職と国家公務員一種の差は、その胸中の苛立ちを含めて、凄まじい格差があるという。渡部は東大卒の本部長に煮え湯を飲まされ、高卒の現場叩き上げの猛者たちに突き上げられ、半ばやる気を失って内2へ来たのもつぱらの噂。常に斜に構え、物事は正面から見ず、せいぜい斜め五十度から眺め、一度メモ帳にスケッチしてから感想を述べる。それが渡部流。それに竹之内はもう慣れた。世の中には本音しかないと思い込んできた真駒内時代。力こそ正義だと思っていたが、頭脳戦もまた力なのだと、渡部のシニカルな唇のゆがみを見て、気付いた。嫌いではないのだ。

「恭順区ってわかるか」

「居住区、ではなくてですか」

「きょうじゅん区、だ」

「何語ですか」

気がつけば、2本目のピースだ。渡部の周りがもやもやと白い。

「『解放日報』に書いてある。敵を知るには、敵の教義も知っておかないとな」

「焚書ものですよ。あんなものは」

「シークリームでも食って頭を冷やせ。筋肉で武装していいのは肉体だけだ。頭は柔らかくしておけ」

渡部はデスクに四六判程度の大きさの、まるで純文学同人誌のような安っぽい表紙の冊子を放った。

……「解放日報」。

樺太を本拠地にする民族主義組織、「ウィルタ解放戦線」の内部

機関紙だ。日報の名がついているが、発行は月に一度。まるで宗教団体の教典のように、何が書いてあるのか理解に苦しむその体裁は、禅寺の経典でも読んだ方がよほど頭のためになりそうだ。

「解放戦線と是永教授がつながるんですか」

「敵の敵は何だ？」

「手を結んでるんですか。アカとテロが」

「大きな声で言うなよ。社会党あたりが大騒ぎするからな」

「もう騒いでますよ。小樽港で」

「いま入港してるのは、『赤城』と、『妙高』か」

「『足柄』もいましたよ」

「見てきたのか」

「昨日。活動家の面取りに」

「俺に報告をあげなかったな」

「喫つても構わんですか」

「おお、好きにすれ」

竹之内はポケットから昨年発売されたばかりのセブンスターを取り出し、米陸軍兵士と腕相撲をした戦利品のジッポで火を点けた。

「下品だな」

「パチンコの景品ライターよりはマシですよ」

「私はマッチがいい。ライターは好かん。それにそんな甘つとろい煙草、喫つてられねえ」

「肺ガンで死にますよ」

「そのときはそのときだ。バラライカ（PPSh-41）で撃たれる方が可能性としては高いかも知れんがな。……陸軍には何年いた？」

「在籍してませんよ。真駒内から派遣されてたんです。訓練で」

「島松か」

「東千歳です」

「あそこには戦車しかないぞ」

「答えなくてはなりませんか」

「……いい。調べればすむことだ」

市電が警笛を鳴らした。

市内も車が徐々に増えている。定山溪鉄道が東急資本に買収され、連続立体交差事業がいよいよ始まるという。定鉄も危うく廃止される寸前だったが、オリンピック選手村が真駒内に建設されることが決まり、同じく着工された市営地下鉄南北線と相互乗り入れをする計画が実現し、温泉街へのローカル私鉄が、一躍札幌市内交通の動脈候補になった。茨戸の新札幌団地や石狩市街地までの延長も含みながら、札幌の街は急速に拡大しつつあった。

「豊平駅のマル被、ゲロったそうですね」

「爆弾野郎か。誰に聞いた」

「訊かんでください」

「ブン屋か。やめておけ、奴らは道具だ」

三本目のピースはすでに灰皿でもみ消されていた。

「竹之内」

「はい」

「それを喫ったら、これを持って出ていけ」

封筒。

「ここで開けるな。私はこれをお前に渡していない。見てもいない。中身は何か私は知らない」

「札幌駅の『ミカド』で本山と会います」

「殺すなよ」

「何をですか」

渡部は、さすがに四本目に躊躇した。

「情報だ」

竹之内は渡部のデスクの、やたらとごついガラスの灰皿でセブンスターをもみ消した。

渡部は自分のデスクにいてもなお、腰からFNブローニングハイパワーを外さない。弾倉も実弾も籠めたままだ。確かめたことはないが、薬室に初弾すら装填しているという。臨戦態勢の上司。この

上司にしてこの部下ありだ。竹之内の腰にも、コルトM1911A1が挿してある。米軍兵士からの払い下げではない。道警私服警官の制式拳銃だからだ。予備部品や弾薬の調達にことのほか便利だから、それだけの話だ。むしろ、渡部がブローニングハイパワーを愛用していることこそ疑問だ。9?口径を使用しているのは、陸軍だ。彼と陸軍情報系部署とのつながりを示唆しない者はいない。そして渡部はそれを否定しない。

「お邪魔しました」

もう渡部は顔を上げなかった。決済を待つ書類をトレイから一枚抜いて、それに視線を落としていた。

市電がカーブを曲がる甲高いフランジ音が耳に届いた。

渡部の背後にある窓から、ニセアカシア並木が見えた。枝だけ。葉はない。北方圏国際通と名付けられた駅前通。誰もその名で呼ばず、忘れ去られた名前。

内2が入居するビルを出ると、舗道を埃が舞っていた。

五番館の上空をヘリコプターが飛んでいた。

道警のヘリだ。

街は活気立っていた。

浮き足だつてもいた。

オリンピックの開催が決まった。

駅前通の地下では、地下鉄南北線の建設が進んでいる。

春の霞みにぼやけて、大通りからさらに向こう、すすきのまでが見渡せる。ごちゃごちゃとした電線の群れ。まだ分厚いコートを纏った市民の流れ。グランドホテル周辺を歩く、身なりのよい紳士、婦人。反対に電停周りでほっかむりをし、海産物を抱えた老婆が歩く。

竹之内は背広のボタンをそつと指でなぞる。

背広をはだけることはできない。腰に挿したコルトM1911A1には、実弾が籠められている。7発、+1発。撃鉄を起こし、安全装置を掛けた状態で。予備弾倉は三本。コルトはランヤードリン

グで竹之内の肉体とつながれているが、もし暴漢に襲われても、拳銃を抜かずとも三、四人なら北大病院送りにする自信があった。竹之内は警官でありながら、東千歳の陸軍部隊で、レンジャー課程を修了しているのだ。徽章が欲しくてではない。必要に迫られてだ。『組織』の連中は、卑劣で、過剰な武装をしており、どこにいいのかわからない。市民に偽装している。パン屋の裏口がアカのアジトに直結している可能性もあるのだ。

竹之内は、麻生行の市電に乗り込んだ。

西5丁目の陸橋を渡る市電の窓から、広々とした国鉄札幌駅の構内が見える。待ち合わせ場所の喫茶『ミカド』は、あの紺色の札幌駅舎二階にある。函館へ向かうディーゼル特急がエンジンを掛けたまま乗客を待っている。昨年電化されたばかりの函館本線、旭川行の電車急行がホームを離れていく。

竹之内は市電のつり革に掴まったまま、鉄北線を北大正門前まで行く。電停に着き、扉が閉じる寸前に、あわてたふりをしながら電車を降りた。通りを迫る貨物トラックの寸前を赤信号のまま掛け渡る。簡単な尾行点検だ。

ゆつくりと二十数えて、北大通を南へ、札幌駅へと向かう。

国鉄札幌駅の地上改札は、人いきれでむっとした熱気が渦巻いていた。北海道の駅の改札は、国電の駅のように、切符を駅員に渡すとそのまま外ということがない。とかく扉が多い。冬季、熱気を逃がさないように、こちらの建物は開口部が少ない。窓も小さく、二重。真冬になると、窓ガラスに霜がびっしりと凍りつき、外が見えなくなるほどだ。

券売所で入場券を買うと、一度改札から中に入った。各ホームへ通じる地下階段を五段ほど下りて、一瞬立ち止まり、くると振り向くと一段飛ばしで階段を上る。そして、元来た改札を抜けた。

視線を向けず、背中の向こうに意識を飛ばすが、誰もついてきた形跡はなかった。一度出会った警視庁公安部の警察官はその行為を「クリーニング」と呼んだが、竹之内はその言葉そのものが持つうさんくささと、エリート然とした警視庁刑事の立居振舞になじめなかった。それすら彼ら一流の演技の可能性も捨てきれないが、人と人を探り、捜し、そして叩きつぶすこれらの作業は、もっともつと泥臭い。

「ミカド」に着いたのは、午後二時に近かった。本山は壁際の席にもう着いていて、しかし竹之内に気付いているのに顔を向けようとはしなかった。

「待ったか」

「前置きはいいわ」

本山は席についていきなりセブンスターに火を点けた竹之内に、露骨に顔をしかめて見せた。本山は煙草を喫わない。

「教授の件」

「第三教室で午後の講義をやってるよ。いまごろ」

「第三教室？ 第三恭順区って知ってるか」

訊くと、本山は意外そうな顔をして見せた。そして口をつぐんだ。

ウェイトレスがやってきたからだ。

「ミートスパ」

本山が一言。

「コーヒーだ」

竹之内はここに長居する気はさらさらなかった。

「食べて行けよ。このミートスパは、不思議な味がする」

竹之内の耳に、出発する列車の時刻案内のアナウンスが届く。

「食い物の話はいい」

「肺ガンで死ぬぞ」

同じことを自分が渡部に言ったな、そう思いながら、竹之内はごろりとやたら大きな氷が入ったコップから水を飲む。

「恭順区って何だ」

「言葉を変えるか。解放区、サンクチュアリ、治外法権、そんなところだ」

「ずいぶん意味が違う気がするが」

「関係ないさ。『赤い鳥』が実効支配している区画のことだ」

「『赤い鳥』だって？」

「そうだ」

「『解放戦線』だと聞いているが」

「寄り合い所帯なのさ。そもそも、『ウイльта解放戦線』にウイльтаなんてもう一人もいやしない。活動家の塊なのさ。安全相互条約をどうのこうのってね。国体をひっくり返すためなら、アラブとユダヤが握手をするような世界なんだ。あそこはね」

本山は道内有力ブロック紙である北海新報の政治部記者が長かった。事情通。が、いま彼がなにをやっているのか、竹之内は知らないことにしていた。どうせろくな仕事ではない。知らない方がお互いのためになる。知れば竹之内は、本山を中央署の留置所にぶち込まなければならぬ。

「安全相互条約がどうしたんだ」

「アメちゃんが、ソ連を包囲するために結ぶ条約だろう。それが赤

い連中は気に入らないのさ」

「わかりやすい論理だ」

「樺太には石油があるからな」

「石油？」

「奴らの闘争資金さ。どこから出てるか、自明なこつた」

「本当にお前、そう思っているのか」

「思っているんじゃない。事実なんだ」

そう言つて本山はまた口をつぐんだ。ミートスパゲッティが届いたからだ。モウモウと湯気を上げている。ミートソースは缶詰ではなく、ここの料理長が毎日手作りしている。トマトソースは鷹栖や平取で栽培される露地物のトマトから作った濃厚な味で、挽肉は道内の契約畜産家から仕入れているのだと、本山は目を細めて語る。

「チーズは興部だ。ここは交通の便がいいからな」

「赤字で廃止されるんだろう？」

「そのとこ、デリケートな話だな。それも赤い連中が関わってくる」

「そもそも」

竹之内は食事中の本山に気を使うことなく、三本目のセブンスターに火を点けた。

「国鉄の駅でこんな話をするのがやばい」

「あんたが？」

「お前のことを心配しているんだ」

竹之内は軋む椅子に上半身をあずける。

「国鉄の労組なんぞ、極左の連中と同義だからな」

「ミートソースの色も赤いだろう」

おそらくずっと仕込んでいたジョークだったのだろうが、竹之内は笑わなかった。

「『赤い鳥』の話を聞かせてくれ」

「奴らは新興だ。68年の仙台駅爆破テロまで、誰も知らなかった」
「二年前か」

「宮城県警がアジトを血眼で捜してるが、マタギの村に匿われてる
とか、現代のサンカだとか、もうほとんど伝説になってる」

「奴らが存在することは事実だ。東北生まれなのか」

「知ってるネタを俺にぶつけてくるんじゃないやねえ」

「事実をすりあわせるんだ」

「お前の中だけでな」

「そのうち教えてやる。お前がまだ記事を書いているとは知らなかったが」

「書いちゃいない」

「じゃあ、言え」

ミートスパゲッティに粉チーズをぶち撒きながら、本山が笑う。

「『解放戦線』より過激だ。津軽海峡を渡ったのがいつかは知らんが、仙台に奴らのアジトはもうない」

「確かか」

「確かだ」

「オロフレ峠に奴らの強化訓練キャンプがあるって聞いたぜ。本当かどうかは知らねえ。あんなとこ、俺には遠すぎてな」

「総括でもやってるのか。毎夜毎夜」

「死人が出たって話は聞かねえな。むしろ、奴らは死人を出したくて仕方ねえのさ。官憲どものな」

本山は眼前の男が官憲であることに気付いていながら、唾棄するが如くの口調で言う。

「安全相互条約絡みで、『赤い鳥』の活動家三人が、千歳基地に侵入しようとした」

「知ってる。北海新報で読んだ」

「そいつはありがたい。あれを書いたのは俺の後輩だ」

「無駄口はいい」

「アイス、もらうぜ」

「勝手にしろ。俺が払うわけじゃねえ」

本山は笑うと、ウェイトレスを呼び、町村農場ミルク、と書かれ

たアイスクリームを注文した。本山は白い歯を見せながら、ウェイトレスに出身地まで訊いた。ウェイトレスは旭川出身だとはにからだ。学生さんか？ ハイ、あの、北大に受かったんで。そりゃすごいな。

「お前の癖は治ってねえ」

「病気は治るがな。癖は治らねえ。お前の堅物ぶりも、病気じゃねえんだな。くせだから治らねえのさ」

「余計なお世話だ」

「アイスが来るまでにちょっとだけ教えてやる。千歳基地に忍び込もうとした活動家な。あれは作業玉が基地にいるってことだ」

「作業玉？ テロリストにか」

「おまえらだけの得意技じゃねえんだ。作業黙って言葉が悪けりゃ『草』とでも言うか」

「たいして変わらん」

竹之内は頼んだコーヒーがいつ目の前に届けられたのか覚えていない。もう湯気も上がっていない。それでも口をつけてみた。

「意外に旨いな、これ」

「冷めても旨い。豆から違うのさ。札幌ではなかなかこんなコーヒ―は飲めないぜ」

「国鉄の金で買ったんだろっ」

「ここは独立採算さ。国鉄にテナント料まで払ってる」

「てことは、俺たちの金が国鉄に流れてるってことだ」

「気にしすぎだ。せいぜい蒸気機関車の石炭代になっただ」

「お前、SLマニアか」

「しょっちゅう故障して動かなくなるディーゼルよりはマシだと思っぜ」

「話の腰を折るなよ」

「『脱線』て言って欲しいね」

「つまらねえ」

本山が満足げに笑うと、旭川出身のウェイトレスがアイスクリー

ムを運んできた。どこの高校出身なの？ 旭川東です。そりゃすごい。

「国鉄内部に赤い連中が多数混じってるのはあんたの言うとおりだが、『赤い鳥』や『解放戦線』は混じってねえ。路線が違うからだ。文字通り。で、いまやばいのは、陸軍や空軍だ」

「軍が？」

「純粋な連中が多いらしいじゃねえか。入隊のときは宣誓するんだろ？ 危険を顧みず、任務にどったらこったらってよ。お前もその口だろう」

「俺は二回やった。お前も知ってるはずだよな」

「真駒内と東千歳でか」

「宣誓をしたのは島松だった」

「陸軍か？」

「空軍に行つたところで、戦闘機に詳しくなるだけだからな」

「その戦闘機だ。いまの空軍の主力機はなんだ？」

「61式戦だ」

「足の長い飛行機だ。樺太はおろか、大陸まで飛べる」

「大陸……」

「快く思っていない奴らがいるってことだ。何とか戦線とか、何色の鳥だか知らねえが」

「情報か」

「情報だ。中身は知らんが」

「アイスをスプーンでこねながら、ゆつくりと本山は口に運ぶ。」

「千歳に今もお友達がいるなら、身边には注意しな。鳥がピヨピヨ飛び回ることになる」

「忠告か？」

「友達として言ってるんだ」

「その言葉を聞き、竹之内は笑う。」

「友達か」

「やっと笑ったか」

「笑い方なんて忘れたさ」

「頭まで筋肉になっちまったか？」

「邪魔したな。ミートスパは今度一人でじっくり食いに来よう。そのかわり、暇になったら俺に連絡をくれ」

「いつでもな」

竹之内は席を立つ。

冷めたが、コーヒーは旨かった。

ウェイトレスは、所在なさげに、カウンターそばで窓の外を向いていた。

旭川行きの急行列車。

それに乗りたいと思っているのかもしれない。

竹之内は、本山に一瞥くれることもなく、「ミカド」を出た。

野崎照之は三〇三教室を出た。

やたらと大きなカバンには、教科書や帳面の類から、いたずらで吸い始めてすつかりやめることができなかったピース、これを生協で買い足した二箱と、絶対に友人たちには見せることができないトカレフTT-33が忍ばせてあった。もちろん、弾倉には八発の七・六ミリ弾が籠められている。官憲には絶対に知られてはならない。安全相互条約締結に関わるいわゆる学生運動が北海道にも飛び火しはじめている。いや、「外人部隊」として、東京大学や遠く京都大学への「遠征」に向かった者もいた。

だが、野崎照之にとつて、それらの学生運動は、少年たちが小学校の放課後に友達同士で遊んだ秘密基地ごつこと大差なく思えた。もちろん、上部団体はそのまま官憲が極左暴力集団と指定する組織であり、学生運動に身を入れすぎ、そのまま活動家になってしまう者もいると聞く。

ちゃんちゃらおかしい。

彼らは、「手段」が目的になってしまっている。組織することも、統率することも、総括することも、そして武器を取ることも、それらはすべて、目的を完遂するための手段であるのだ。それらの活動そのものが目的であるはずもない。あくまでも自分たちは結果が欲しいのであり、過程などどうでもいい。結果が出るのであれば、武器もいらない。暴力的総括も必要ない。組織もいらない。

しかし、この国の警察機構や軍、政府に対抗するには、彼らに対して声高な意見をぶち込むためには、組織は必要であり、統率も必要であり、組織に対する規律を破った者に対する総括も必要であり、武器もまた必要なのだ。

トカレフは、留萌の港で手に入れた。

札幌から、旭川行きの普通列車に乗った。

走り始めたばかりの交流電車は、もっぱら札幌・旭川間の急行列車に充当されていた。野崎が乗り込んだのは、ディーゼル機関車に牽かれた客車列車だった。数年前まで、これは蒸気機関車が牽引していた。芦別や赤平、上砂川や美唄から石炭を満載し、D51蒸気機関車に牽引された長大な石炭列車となんどもすれ違った。ディーゼル機関車の排気が、D51の煙突からもうもうと吐き出される煙の前では、すっかり薄く頼りなく見える。

深川駅から留萌本線に乗り換え、小さなタンク機関車C11に牽かれた、わずか三両編成の普通列車に揺られて、まだ枯れ枝しか見えない野山を、車窓からぼんやりと眺めながら、ピース一箱を費やして着いた港町は寒かった。

南側、増毛から雄冬、浜益を経由して札幌まで鉄道を建設して欲しいという機運があるというが、いまは国道建設が盛んだった。それにしても、港にはロシア人が多い。もっとも、樺太の大泊に比べれば、留萌港は規模も小さく、ロシア人の数も少ない。野崎は樺太の出身だ。中心都市豊原市郊外の軍川。小さな町だが、そこにも炭坑があった。朝鮮人の労働者がいた。みな気性が荒く、そして陽気だった。落盤すれば命はない。山の男たちはみな陽気で、まさに豪放磊落を地で行っていた。石炭列車をD51が牽引する姿も、北海道と同じだ。だから、野崎は不思議と、室蘭本線や夕張線、根室本線の雰囲気嫌いではなかった。故郷を思い起こさせたからだ。

留萌港のふ頭に近い倉庫で、二箱目のピースに手をつけながら、野崎は待った。この日、カバンには、教科書や帳面の代わりに、現金が詰められていた。組織から預かった大切な金だ。

野崎の実家は大規模農場を経営する農家だ。家族経営ではない。北海道や東北から祖父の代までさかのぼって移住してきた従業員がいる。秋には豊原から出面が来る。赤い頬をした中学生の女の子も手伝いに来る。野崎の妹も姉も畑に出た。抜けるような秋晴れの空、

はてしない畑、遠くに煙を吐く石炭列車、豊原基地の空軍機。故郷の風景は、北海道、道北地方のそれによく似ていた。

北大に進学するとき。

父の自動車で豊原駅まで見送られた。

ディーゼル機関車に牽かれた普通列車で大泊まで。母が港までついてくると聞かなかつたが、父が止めた。家を出て父の車に乗り込むまで、中学生の妹は手を離さなかった。豊原の百貨店に勤める姉も、仕事を早上がりして見送りに来てくれた。

そうして北海道に渡ってきた。

樺太には国立の大学がない。札幌か旭川まで出るしかない。だから北海道に渡ってきた。

樺太にいと、宗谷海峡から南に疎くなる。

稚泊航路と青函航路を本州出身者は一緒にたに語ろうとするが、国鉄がトンネルを掘ろうとしている海峡と、未だ海軍の艦艇が封鎖し続けている宗谷海峡では雰囲気からなにからすべてが違う。冬になれば流水が流れる海峡だ。宗谷岬やノシャップ岬が見え、北海道のテレビやラジオがよく届くが、それでも元は外地だ。北緯五十度線で日本軍とソ連軍がしっかりとにらみ合っているあの雰囲気、札幌の人たちは理解できないだろう。

「テルか」

三本目のピースを喫っていると、背後から声を掛けられた。

分厚いコートを着、両手をポケットに突っこんだ髭面の男。

「住本だ。久しぶりだな」

「お久しぶりです」

髭面の男、住本は、それでも両手をポケットから出そうとはしない。野崎はわかつている。ポケットの中には、マカロフPMが入っており、野崎の右手はそれをしっかりと握り、銃口は野崎を向いているのだ。

「いつついた。飯は喰ったか」

「深川で食べてきましたよ。幌加内そばっていうのを」

「あれは旨い。新そばは格別だ」
「味なんてよく分かりませんでしたよ。駅で食べたんだ」
「今度は深名線に乗るといい。幌加内駅で降りて、『笹木』って店に行け。あそこの天井は最高だ」
「そばの話じゃないんですか」
「そば屋の天井は旨いんだ。そばが旨い店は特にな」
「そばの話をしに来たんじゃないんですよ」
「留萌は初めてか」
「ええ。でも、匂いが大泊に似てます」
「言つと、住本は薄ら笑いを浮かべていた口許を締めた。
「似てるか」
「……似てますよ」
「ここには海軍の船はいないぞ」
「だからあなたと会えるんじゃないんですか」
「……お前、いくつだ」
「二十歳です」
「ハタチか。うらやましいぜ」
「住本さんだつて、昔はハタチだったんでしょ」
「昔の話だ。いまはその倍の歳だ」
「住本は歩き出した。ポケットの手はそのままに。
「持ってきたか」
「ええ。持ってきてくれましたか」
北海道の日本海沿岸の町は、どこも似たような匂いがする。似たような風景だ。木造のみすばらしい民家、原色のトタン屋根。潮の匂い。汚らしい漁船。大泊にはこれに、灰色の海軍艦艇が加わる。時折空母や巡洋艦まで入港する。それは、北緯五十度以北の隣国への無言の圧力だ。それを軍事的にはプレゼンスと呼ぶ。さすがに一九四〇年代に建造された世界最大の戦艦が入港したときは、野崎も見に行ってしまったが。
「何か喰わんか」

「腹は減ってませんよ。それより、帰りの汽車の時間があります」
「こつちだ」

ついていくと、錆の浮いたトヨタ・パブリカが停まっていた。エンジンのかかったままだ。運転席に男がいたが、こちらを向こうともしなかった。住本が運転席の窓をノックすると、男が窓を開いた。住本が鋭く言う。ロシア語だ。野崎もロシア語を解する。彼はこう言った。

>こいつは同志だ。約束の品を出せ<

男は住本の言葉にも返事もせず、黙って運転席を降りた。そして、トランクを開く。

「いつからあなたと俺は同志になったんですか」

「さつきからだ」

「俺は…… コミュニストじゃない。インターナショナルだって歌えない」

「だが、活動をしている。そういうことだな」

「だから同志だと?」

「こいつはロシア語をしゃべるが、ロシア人じゃない。敷香の北から来てる。国境の向こうだ」

「ウィルタですか」

住本はわずかにうなずいた。

「お前も樺太で育ったんだ。わかるか」

「ええ。でも、」

「でも?」

「ウチの畑にもウィルタの人が来ていました。けど、俺たちは別に」
「お前はまっすぐに育ったようだ。俺にもそう見える。でも、まっすぐじゃない奴だっただくさんいるってことだ。違う言葉をしゃべる。顔の造作がちよっと違う。食べる物が違う。文化や歴史が違う。それだけで、十分なのさ。おまえらにしてみたらな」

住本はそう言うと、前歯をむき出して笑った。

「お前らは、ヤイ・カムイだな」

「何ですか？」

「邪悪な神様。日本語に無理矢理訳せばそんなとこだ」

「俺がですか」

「和人がだ」

「住本さん……？」

「俺たちは文字を持たなかった。物語もすべて口伝えさ。それがどうだ。あと三〇年ちょっとで二一世紀だそうだが、俺たちの仲間で、ユーカラをすっかり自分の言葉でしゃべれる奴なんていなくなった。俺もできない。……言葉を奪われるということは、それは文化を奪うってことなんだ。お前は日本人だ。戦艦や戦闘機を振りかざしてる日本人だ。カムイコタンに道路を造り、線路を敷いた日本人だ。民族としてはな」

住本はそう言うつと、またロシア語で男に鋭く話しかけた。

男はまた無言でトランクから旅行鞆のように大きな箱を取り出した。

「一人で持てるか」

「大丈夫です」

「バラライカが二挺。トカレフが、五挺。それと、」

住本もトランクに廻り、一回り小さな鞆を取り出した。

「弾薬だ。いいな」

「……しっかり持って帰ります」

「郵便局から小包で出したりするなよ。匂いでバレるからな」

「バレますか」

「カニ採ってる漁船の船倉に隠してきたからな。カニくせえ」

そう言うつて住本は、野崎に紙包みを放って寄越した。

「毛ガニだ。二杯。喰っていけ。札幌に持って行く間に腐っちまう。ここで喰え。俺の分も、こいつの分もある。三民族で北方サミットだ」

住本はまた笑った。

炭坑夫たちのような、豪快な笑顔で。

それが留萌港での邂逅だ。

毛ガニは、ずっしりと重く、そして旨かった。採れてすぐに茹でたのだそうだ。

ウィルタの男は結局最後まで野崎を無視していた。野崎が日本人だからだったか。それとも、出身地の問題か。

三〇三教室を出、階段を下りる。

学生たちの雑多な匂いがする。

中途半端な季節、やたらと軽装なのは地元の学生。やたらと厚着でぎこちないのは、津軽海峡を渡ってきた学生たち。そう見て間違いない。ただ、北海道民と、宗谷海峡の北からやってきた「北海道民」の区別は、残念ながら野崎にはつかなかった。言葉も同じ、顔立ちも同じ。同じ民族だからだ。

思想や意思は、外からは見えないのだ。

それが、恐ろしい。

だから、恐ろしい。

野崎は、そのまま大学を出る。活動はするが、講義をひとつたりとも欠席しないのも、また野崎の流儀だ。本業は学生。きっちり好成績を取り、卒業し、社会の中核に食い込む。それもまた活動の一環だ。

だから、その前に、これら結果を導くための道具を、奴らに奪われることがあってはならない。

野崎は、音にならない口笛を吹く。

翼が欲しい、と。

そつと口笛を吹くのだ。

円山公園の桜がほころびはじめていた。

日はすでに稜線の向こうへ沈んだ。札幌の街は、様々な灯火が瞬きはじめていた。

「テル」

呼ばれて振り返る。

「名前を呼ぶな」

以前会ったとき、髪は肩まで届いていなかった。風にさらさらとそよぐような黒い髪。そして、好奇心に満ちたような黒目がちな瞳。「なぜ？」

「感づかれるからだ」

野崎は距離を縮めることなく、低く言う。

「誰がここまで？」

「警察」

「いないわ」

「軍」

「憲兵が？」

「情報系の奴らさ。三〇一がここまで出張ってきてるって噂だ」

「そんなこと、」

軽やかに、一步。野崎へ歩み寄る。

「聞いたことないわ」

「カンナミ」

「名前で呼ばないんじゃないの？」

神南千夏。彼女は身長が高い。ただでさえ目立つ。野崎は肩から提げたカバンの中に、右手を突っこんでいた。指先にトカレフの銃把が当たる。

「教授になにかあったか」

正対するのをやめ、並んで歩く。そうした方が、ここでは目立たない。学生カップルだと思わせた方がよい。

「あなたが見に行けばいいのに」

「学部が違う。見慣れない奴が来たって、連中の印象に残ってしま
う」

「慎重ね。そのまま道警に入って、公安にでもなればいいんだわ」

「願い下げだ」

「でも、」

神南もまた、肩から提げたカバンに右手を入れた。何となく緊張

する。その白く細い手首で拳銃が撃てるのだろうか。どうでもいいことを考えてしまう。白く細い手で取り出したのは煙草だった。ホップ。希望？

「千歳の話、聞いたわ」

野崎は返事をしない。

二人は北海道神宮の境内に入っていた。桜はまだほころんだだけ。花見客はいない。

「あなたの組織でしょ」

慣れた手つきで煙草を喫いながら、神南が言う。

「俺の組織じゃない」

「北大の学生だって聞いたわ」

「情報を抜いたのは学生じゃない。誰から聞いたんだ。そいつは危ないぞ」

「危ないって、私が？」

「知りすぎるってのは危険なんだよ」

野崎は神南の肩をつかんだ。ふっと神南の髪が揺れ、不意にいい匂いがした。

「どうかしてる。……疲れてるんじゃない？」

「是永教授に道警がついてる」

「道警が？」

「このあいだの集会には、真駒内の特機が出てきたし。奴ら、やる気みたいだな」

「あなたたちだって、鉄パイプにアスファルトってわけにはいかないでしょ」

「君は、」

野崎もピースを取り出して火を点けた。

「安全相互条約のあのバカ騒ぎ、どう思うんだ。東京まで行ったのか？」

「ウチの学校は、冷めてるから」

「誰も行かないか」

「急進的な連中は参加したみたい。切符代を出せって言われたわ」

「切符代？」

「上野までの。一昼夜掛けてよく行くわ」

「出したのか」

「まさか。私は、そこまでしないわ」

「けど君は、」

ことのほか深くピースを吸い込む。視界がぐっと一瞬暗くなり、肺が締め付けられるような快感。吸い始めのころ、これが嫌いだった。

「『新世界革命機構』のメンバーだ」

「準構成員。正規メンバーじゃないわ」

「遊びじゃないんだ」

強く言う。東京で通りの敷石をはがし、アスファルトを砕いて警官隊に投擲している連中を、野崎は遊び半分だと感じていた。東京に住んでいる時点で、彼らに危機意識などない。ソ連の戦闘機がしきりに領空侵犯を繰り返し、都度空軍の戦闘機がけたたましい爆音を市街地にぶちまけて、緊張の合間に生活があるような、あの樺太の日々。住民たちは、大泊の港に海軍の艦艇が寄港することを諸手を挙げて歓迎するのだ。もはやあの地域は、日本軍のプレゼンスなしに安心という言葉が聞かれない。それは、進歩的言論と反政府的論調で紙面を構成する北海新報ですら、海軍寄港を歓迎する読者投稿を一定本数掲載せざるを得ない事情からも容易に推測できるのだ。野崎にしてみれば、北海新報の論調も遊び半分だ。東京より「前線」に近いとはいえ、「保たれた秩序」が「平和」という言葉の代名詞であるとするっかり忘れてしまい、ソ連軍の大演習より、二年後に迫った札幌オリンピック関連記事を盛大に盛り上げ、背景にある市の莫大な借金、はてしない土木工事のことは棚に上げている状況からも見て取れる。

「真剣に考えてるんだ。俺たちは」

「あなたの組織、私たちの組織とは、歩調が違う」

「君のところは、共産党系か」

「……政党はバックについてない」

「そんなバカな話があるか」

「本当よ。樽商、札幌大、学芸大と北海学園の同志が集まって作られたんだから」

「北大はセクトにいないのか」

「知ってるくせに。いないわ。それはあなたの方が詳しいはず」

「『赤い鳥』とウチの組織」

北大でヘゲモニーを形成しているのは、学生部会が下部組織として機能している『赤い鳥』であり、野崎が所属する組織だ。もともと、両者の力関係は全く拮抗しておらず、野崎の組織が比較的発言力を保っているのは、触れれば誰しも切り傷を負うように鋭いその活動方針そのものが影響しているのだ。

「はつきり言っぜ。俺は学生運動なんかには興味がない。どうせ、就職活動をはじめたら、学生運動をしていたことを隠すような連中だ。検挙や逮捕歴がなければ、道警や士官学校の試験さえ受けに行きような、実質的なノンポリの能天気集団だ。まったくおめでたいよ」

話ながら苛立っていた。神宮の鳥居をくぐりながら、すっかり日が落ち、夜景となった札幌中心部の風景を、野崎は二本目のピースに火を点けて眺めた。

「あなた方って、どういう思想なの？」

「はつきりしてる。安全相互条約なんかどうでもいい。」

「どうでもいい？」

「アメリカと日本が軍事同盟を結んでどうのこうのって話だろう？ せいぜいが黒船来航の修好通商条約の二の舞にならないことを祈ってる」

「ソ連に対抗するためなんでしょう、だったらあなたたちは体制側につきそんな気もする」

「心から北方の安定と平和を願っているなら、なぜ豊原に最新の戦

闘機を配備しない。大泊を軍港化して、重巡洋艦でも常駐させればいいのになぜしない。結局、政府は、本気でソ連と事を構える気なんてないんだ」

「択捉島には空軍の戦闘機基地を作ったでしょ」

「一個飛行隊だって話だ。千歳の半分以下の規模だ。それに、北千島をどうするかなんて、誰もなにも言わないぜ。沖縄は厚遇してるくせにな」

ふと、野崎は腹が減ったと思った。もともと食べ物には執着しないが、気付けば今日は朝に学生生協でパンをかじって以来何も口にしていなかった。

「『赤い鳥』と共闘しようとは思っていないの？」

「考えていない。奴らもしょせんはお遊びだ」

「あなたは、」

神南が言葉を区切り、野崎のコートの袖をつかんだ。

「何をしたいの？」

「鎌とハンマーも星条旗も、俺には興味がないよ。終着点としてはね。ただ、道具としてなら使ってもいいさ」

参道から木立が続く脇道に入り、野崎はトカレフTT-33を鞆から取り出した。

「ソ連製、でしょ」

「道具だ。君だって、煙草を喫うときに使っているライターは、あれはアメリカ製だ」

「私はアメリカは嫌いじゃないもの」

「矛盾してる。『新世界革命機構』は、アメリカの覇権主義的思想を嫌い、日本のアジア共栄圏構想も嫌い、実質的な赤化鎖国を目指してるんだろう？俺にはなんかのたちの悪い冗談か、出来の悪い小説みたいに聞こえるけど」

言っと、神南は黙り込んだ。

「結論だけなんだ。俺が欲しいのは。そのための道具なんて、きちんと動いてくれれば、どこの国で作られようが関係ない。イスラエ

ル人はドイツ製の銃では絶対に戦わないだろうし、アラブ人はU2
Iサブマシンガンなんて絶対に手にも取らないだろうけど、俺はど
うでもいい。撃てれば、ちゃんと作動すれば、問題ない。そのため
の訓練だつて受けた」

「是永教授が道警にマークされてるって話は？」

「教授は急進的すぎる。北海新報の連載もやばすぎる。思想は相容
れないけど、あの姿勢はすごいと思う。けれどやり過ぎだ。この国
の治安機構に消されるぜ」

「考えすぎでしょ」

「結束集会に特機が出たんだろう。十分だぜ」

「あなたの組織を狙って、という話も聞くけど？」

「そもそも君は、俺たちの組織の何を知ってるんだ？」

「名前」

「それから」

「あなたがその一員だつてこと」

「それから」

「重武装主義だつてこと」

「そして」

「『赤い鳥』と共存してるふりをしてるってこと」

「まあそれに近い」

「本当の姿が誰にもわからないってこと」

神南がそこまで言うのと、野崎は三本目のピースを抜いた。俺はラ
イターは使わない。マッチで十分だ。

「IACO」

神南が言う。

「略称でしょ」

「そうだ」

「本部って、どこ？」

「言えない」

「どれくらいの組織なの？」

「言えない」

「何をしようとしているの？」

三本目のピース。辛い。

「……北海道の、独立」

野崎は、トカレフの銃口を、神南千夏のみぞおちにそつと当てた。弾薬は薬室に装填してある。この銃に安全装置はなかった。コルトM1911A1なら、撃鉄を起こして安全装置を掛ければ、そうそう不安になることもないだろう。だが、この銃は、ワルサーPPKの安全装置が信頼できない以上に、即発の可能性を秘めていた。

「野崎君」

トカレフの撃鉄は起きていない。引き金の外、用心金に人差し指を起き、銃口の代わりに、左手の人差し指をそつと神南千夏のみぞおちに当てた。

「神南」

いい匂いがした。神南の髪の毛の匂いだ。

野崎は、トカレフをカバンにしまい、右手を神南千夏の背中にそつと回した。

肌寒かったから。

まだ、春は浅いのだ。

何もなかった。

ここを本当に重要港湾として開発する気なのかと、点在する湿地、砂粒を飛ばす砂丘、一直線に続く砂利道と墓標のように並ぶ電柱を見て、竹之内はしばし歩を止めた。

石狩。

札幌市の人口増加が二次関数の曲線のように伸び始めて以降、かつて日本海を望む立地から漁業と、石狩川河畔地域を主とする農業が基幹産業だった石狩は、急速に宅地開発が進んでいた。折しも札幌オリンピック開催が決まり、札幌都心から北区新琴似まで延伸された市電がそのまま地下鉄に生まれ変わるのを機会として、石狩花川地区までの鉄道路線が着工されることになった。市営地下鉄と相互乗り入れを前提としており、定鉄とも直通する。経営母体は東急で、北の終着は花川北地区になるという。

北海道庁……道は、一二〇万人の人口を抱えてはいるが、海岸線を持たない札幌市の港として、石狩湾新港計画を本格的に進め、喫水の深い大型貨物船やタンカーですら接岸できる、堀込み式のふ頭まで用意するというのだ。その先駆として、小樽市銭函から石狩、そして札幌市北区の釜谷臼へ抜ける新規国道の着工、各種港湾道路の建設が始まっており、ここに重機が動き始めていた。

それにしても、ここには道路と建設機械と倉庫、それしかないのだ。鉄道の路盤の建設も始まったらしいが、何もない。野原に駅を造る気なのだろうか。竹之内は煙草を喫おうと思ったが、周りは乾いた枯れ草が繁っており、新緑はまだ早かったから、野火でも発生させてはいけなさと、控えることにしていた。

労働者が集まれば、金も動く。けれど、と竹之内は思う。

北海道は、国が金を落とさなければ何も生み出せない。道民もそれを期待している。人口一二〇万人もの人口を擁する札幌市は、仙

台や福岡と同じ、いわゆる支店経済でかろうじて成り立っている状態で、基幹産業はと訊かれると、人口や都市の規模からはあまりに不釣り合いなほどの建設業者の数から、「土建業」と答えるしかない。まさか丘珠あたりでさかんなタマネギ栽培が札幌を支えているはずもなければ、いまだに北区や豊平区で見られる中規模酪農も違う。道央地区には百八十万人以上の人口があるが、私鉄路線は東急に買収された定鉄のみ。教育水準も沖縄県に次いで全国では下から二番目。けっきょくお上が「何かをしてくれる」のを待っているのが北海道であり札幌の現状だ。

オリンピックもそうだ。市民が熱心に活動したとはついに聞かなかった。一九四〇年に開催されるはずだった幻の札幌オリンピックが、日中戦争の影響で中止になり、その後ドイツが引き起こした欧州大戦で世界はオリンピックどころではなくなり、当時の同盟国だったイギリスは、粘りに粘ってロンドンを猛爆され、ドイツに降伏してしまった。アジアは一時きな臭い雰囲気も漂ったが、かろうじて欧州大戦が飛び火することはなかった。

大戦で疲弊した欧州が復興するのに、十五年以上かかったという。史上最大最悪の戦争、悪夢の地上戦とまで言われた独ソ戦が元凶なのは明白だったが、欧州戦線にアメリカが参戦しなかったことで、結局「戦後」は、太平洋を挟んで日米が対立する構図になってしまった。

竹之内は地平線まで見えそうな石狩湾新港「予定地」を後にする。防風林沿いを歩き、「札幌急行鉄道石狩線 花川中央駅建設予定地」の標識の前で立ち止まる。

「札幌急行鉄道……」

ようやく、セブンスターに火を点けた。

定鉄も名称変更されるそう。札幌急行鉄道定山溪線と云うのだという。市民はそれでもみな定鉄と呼ぶ。本州資本に対する抵抗だが、それにしても、と思う。

「情けねえ」

東急が資本を注入しなければ、石狩まで線路を敷くこともできなかったか。インフラストラクチャーは誰かが作ってくれるものだと思うっていたか。

だから、海峡を越えて不穏分子まで流れ込んでくるのだ。

東京は、日米安全相互条約締結に絡んで学生運動が最盛期を迎えている。実質的な軍事同盟だ。一九四〇年代、太平洋を挟んで、アメリカは東南アジアから中華民国……中国の利権を狙って、日本と一触即発の事態を迎えた。そうでなくても、アメリカ、イギリス、ソ連、列強の利権が複雑に絡んでいたのが当時のアジアだった。上海事変。日本統治下での朝鮮半島での様々なテロ行為。住民たちが蜂起した事例などひとつもなかったというのが定説で、各地で発生した紛争やテロ行為は、列強の意思だった。

結局日本が戦争に巻き込まれずに済んだのは、アメリカがいわゆるモンロー主義に凝り固まり、「一人たりとも、アメリカ人の血は国外で流さない」と当時の大統領が国民に、あの単純で熱っぽい国民に約束をしたからだ。ボタンが掛け違われれば、昨今書店を賑わせているという仮想戦争小説のように、日米両国は戦端を開き、欧州大戦は世界大戦に発展したことだろう。竹之内も後輩がそれらそうした小説を読んでいるのを見たことがあった。アメリカが日本に対する石油輸出を止め、中国大陆の利権を強引に奪い取るうとし、日本がついにハワイのアメリカ太平洋艦隊を奇襲攻撃する……。

それは当時の日本人の願望でもあったのだろう。傲慢な欧米人に刃を突きつけ、我を通したい。が、「巨人」アメリカは圧倒的な物量で日本を攻撃し、東京や大阪は焼け野原にされ、史実の欧州戦線でも使用されることのなかった核兵器まで投下される。そうして日本は敗戦し、アメリカによる占領統治から再出発する。

願望だ、と思った。

価値観がすべて、一夜にして反転する。

前夜まで大切なものだと思ってきたことが、翌朝からはそうではなくなる。

古いもの、それらしがらみと呼ばれる重しを取り払い、新しい日本を作る。

願望だ。

日本は複雑になりすぎている。

けれど、とも竹之内は思う。

リセットなどできないのだ。すべてを白紙にして、新しい絵を描くことなどできないのだ。いまの、この混沌とした世の中で、俺たちは生きていくしかない。必要なのは秩序だ。混沌を正すのは、俺たちだ。

石狩新港の建設労働者に、活動家たちやそのシンパが混じっているとの情報があった。いつもどおり、渡部がぶっきらぼうに指示を出した。内2の渡部の部屋で。

「コルトの予備弾倉も持って行け」

渡部は唇の片側を持ち上げるようにして笑って見せた。

「そんな、危険だと？」

「保険は掛けておくものだ。保険を掛けておいたからといって、事故に遭うわけでも、病気になるわけでもないが、事故に遭ったり病気になったとき、保険を掛けておかないとひどい目に遭うからな」

竹之内は言われずとも、M1911A1は常時携帯していた。道警の警察官なら、非番時や帰宅時に拳銃を携帯することはないだろう。だが、竹之内には非番も休日もない。存在そのものが任務であり、だから常に拳銃は携帯していた。ランヤードでしっかり竹之内本体とつないでおきながら。

札幌石狩線の建設予定地には、巾杭が打たれている。その脇の砂利道に、トヨタ・カローラを停めてあった。内2の車両ではなく、竹之内の私有車だ。雪が溶けてからまだ洗車をしていない。薄汚れていた。けれど、かえってそれが好都合だった。目立たないのだ。今年発売されたばかりのセリ力を待たず、カローラをさっさと買ったのは正解だったかもしれない。運転席に座り、二本目のセブンスターを喫った。喫いながらエンジンを掛ける。一発で始動する。冬

の間も調子は悪くなかった。旭川あたりでは真冬にエンジンがかからなくなることもあったようだが、竹之内のカローラはぐずることもなく、快調に走ってくれた。

時計を見る。午後二時。

今日は休日ではない。石狩新港予定地をほんの少し歩いて空気感を確かめ、その後はカローラで一周してみようと思った。親船のあたりは渡船が石狩川を渡り、小さな漁村の雰囲気を色濃く残しているが、その南側、地名もないような新港予定地はどんな雰囲気か、歩いて行くには広すぎた。

クラッチペダルを踏み込み、フロアシフト四速のローに。クラッチは軽い。ゆっくり繋いで走り出す。時速二、三〇、四〇キロ。ここ数日雨がなく、道路は完走している。ミラーを見ると、真っ白い埃がモウモウとカローラの後についてくる。左手にサイロ。小さな牧場。このあたりは湿地と砂地で畑作には適さない。だから人も少ない。防風林をまた過ぎて、真っ平らな原野に行く。

午後二時十五分。

本山と会う予定だった。

千歳の続報は、とても札幌駅のあの喫茶店などでは話せない。街中で二人が顔を合わせるのも無理だ。現役の内2課員と元記者だ。それなりに業界ではそれぞれ顔が知れている。ならば、と竹之内は考えたのだ。青田刈りをしよう。そして、その「田んぼ」を二人で見とおこう、と。

ここにはミートスパも旭川出身で北大生のウェイトレスもいないが、真っ昼間から陽射しを避け、暗い目をした男たちがいるかもしれない。

悪の芽はさつさと摘むがいい。それが最善だ。

竹之内は運転しながら、腰のホルスターに意識をやる。M1911 A1のずっしりとした感覚がここにある。アメリカ製というのが唯一の欠点だが、45口径弾の強力さ、シンプルな構造から来るメンテナンスのしやすさ、それらは「重すぎる」と一部で酷評される

重量すら補ってあまりある。軽い銃は好かない。反動がその分きつくなるからだ。

カローラは走る。

国道の建設現場を横切れば、新港地域だ。

海岸線までひたすら原野が続く。

どこにいる？

奴らは、たしかにもうここに上陸しているのだ。

見届けてやる。

イデオロギーなど、俺には関係ない。ただ、秩序を乱す者は許さない。混沌を招く者は許さない。それが俺の仕事なんだ。

竹之内は、浮き砂利にハンドルを取られないように慎重に運転する。

カローラのハンドルは機敏で、素直で、心地よい。

エンジンを止めたカローラの運転席。

窓と言わずドアも全開にして、竹之内はセブンスターを喫っていた。助手席には、本山。

「せっかくの新車がダメなるぜ」

本山はうつすらと無精ヒゲが生えていたが、不思議と不潔な印象がない。不思議な男だと思った。記者職を辞めて、どうやって生計を立てているのか知らないが、情報通な部分はそのまま、しかし知り得た情報を記事にすることもできず、その情報の排水口がどこにあるのかよくわからない。銀行でもあるまいし、金庫に入れて利子を回しているわけでもあるまい。

「どうやってここまで来た」

「歩いてだ」

「どこから」

「樽川」

「気長な奴だ」

「時間だけはいくらでもあるんだよ」

「お前、どうやって生計立ててるんだ」

「書き物だよ」

「物書きじゃなくてか」

「書き物だ」

「言葉つてのは難しいな」

「それよりお前はさっさと煙草をやめるんだな。煙たくて仕方がねえ」

手をうちわに煙を払う本山も、助手席のドアを全開にしていた。四方は何もない。草原だけ。それでも北電が砂利道に電柱を並べはじめていた。企業を誘致するというが、ここが苫小牧や室蘭に負けない貿易港になるとはどうしても思えない。

「そうさ。けど、苫小牧も室蘭も、百年前は港なんてなかった。作
ったから港になったんだ」

本山が言う。

「お前は石狩新港賛成か」

「条件付き。経済が潤うのはいいことだ」

「その条件を聞かせてくれ」

「港湾につきものなのはなんだ」

「船」

「それから」

「倉庫」

「倉庫を管理するのは誰だ」

「倉庫業だ」

「そこで働くのは誰だ」

「労働者」

「港湾労働者だ」

「そうだな」

「神戸に行ったことはあるか」

「ない」

「神戸の名物はなんだ」

「肉か」

「違う」

「六甲降ろし」

「違う」

「なんだ」

「ヤクザだ」

「ヤクザなら札幌にもいる」

「日本最大のヤクザは、港湾労働者の団体だった」

「ああ、」

「お前は左向きばかりを相手にしてるから、そっち方面の知識が浅
いんじゃないのか」

言われればそうかもそれないと竹之内は思った。道警の巡查時代、夜の繁華街の警邏もやった。ヤクザは死ぬほど嫌いだ。ヤクザ映画が大流行したころも、見る気もしなかった。任侠だ仁義だと、そんなものを大切にする連中が、堅気から金を巻き上げ、脅し、弱みを握り、骨の髄までしゃぶり上げる。それがヤクザだ。任侠も仁義もない。奴らは社会のダニだ。疫病だ。共存はできない。共存できない疫病はどうするか。叩きつぶせばいい。絶滅させるしかないのだ。

「お前、ヤクザ嫌いか」

本山が訊く。

「大嫌いだ」

害虫は踏みつぶさなければならない。あるいは殺虫剤で根絶させなければならぬ。奴らは街の害虫だ。

「港湾労働者とヤクザは、切っても切れない関係だ」

「今さらなんだ」

「ここに苦小牧以上の港を作ろうっていうなら、奴らもセットでついてくるってことだ」

「それが条件付きってことか？」

「実際、もう道警の四課は動いてるそうじゃないか」

「そうなのか？」

「お前、公安職だろう」

「いまは畑が違う。道警とも関係がない」

「担当が違うか。役人みたいだな」

「公務員だからな」

「苦小牧はもう、連中の息がかかってる。石狩に港なんて作ったら、連中も来るさ。まっさらな土地だ。好きな絵を描けるからな」

「描かせねえよ」

「期待してるさ。で、」

助手席で本山が向き直る。後ろ手で助手席のドアを閉めた。

「お前が知りたいのはヤクザのことじゃねえだろう」

「さっさとしゃべれ」

「千歳基地の続報が知りたいんだっ たな？」

「そうだ」

「じゃあ、陸軍がなんで千歳、恵庭と駐屯地を数珠つなぎにしているのか教えてくれ」

「今さらか」

「教えてくれ」

「石狩平野から勇払平野にかけてが、回廊地帯になるからだ」

「だから？」

「ソ連軍が太平洋に出られないようにするためだ」

「ソ連軍？」

本山はわかっていて訊いている。物事には順序がある。それを実践しているに過ぎないのだ。竹之内に物語を語らせている。

「石狩湾に上陸したソ連軍が太平洋に出られないようにするんだ。

札幌をこう、ぐるっと囲むように演習地と駐屯地を作っておけば、大部隊を市街地を経由せず動かせるしな」

「さすがは東千歳に『留学』してただけある」

「簡単な理屈じゃねえか」

「ソ連軍は石狩湾に上陸してくるか」

「樺太と同時に来るだろうな。やるとしたらの話だが」

北緯五十度線を突破したソ連軍は、まず豊原を狙うだろう。樺太駐留の日本軍は精強部隊だが、量で押してくるはずのソ連軍にどこまで対抗できるのかは、実は疑問視されていた。北海道や本州からの増援が到着するまで、遅滞防御を続けるしかないとも云われている。

「宗谷海峡を渡って道北に、というシナリオじゃなくてか」

「連中が二正面作戦で来るとしたら、樺太と、いきなり札幌だろう」

「そう思う根拠はなんだ」

「これだけの大都市で、日本海に面している街は、日本ではここだけだ」

「福岡」

「日本海っていうより、あれは東シナ海だ。それにソ連よりは朝鮮に近い。朝鮮は……国民的感情もあるんだろうが、一応は友好国だからな」

「新報時代、取材に行っただ。食い物は旨いな。日本には絶対に存在しない味覚だ。ある程度日本語は通じるし、清津の製鉄所なんて立派なモンだった」

「福岡が朝鮮軍に攻められるってんなら、そりゃ可能性は相当に低い。けど、ソ連軍の揚陸艦が、闇夜にまぎれて石狩湾から上陸するって話は、俺はある程度説得力があると思うぜ」

「被害妄想じゃなくてか」

「さすが、妄想新報の元記者さんだぜ」

「言っな」

「頭の中がおめでてえとしか思えねえ記事を書くからな。いまだにソ連が友好国だと思ってるのか」

「本気でそう思ってる奴はいた。共産主義にかぶれてる奴だ」

「よく公安にしょっ引かれねえな」

「マスコミだからな、一応。言論の自由って奴だ。憲法で保障されてる」

「それも時と場合による。ここは北海道だ。ソ連が友好国だなんて世迷い言、酒の席でも言っただくねえ」

日露戦争に旭川の第七師団が出兵し、かの二百三高地で散華した命が、故郷の空気を求めて、いまだあの練兵場に亡霊として蘇るという怪談がある。戦った相手はロシア軍だ。そのロシアが赤色革命でソビエト社会主義連邦共和国と名前を変え、世界有数の軍事大国となっただいま、民主主義が存在せず、共産党による一党独裁、領土的野心も十九世紀の国家並みというあの国を、どうやってたら信頼できようか。竹之内はそう思う。まして、彼らの教義とも言っべき共産主義のバイブルを戴き、東京や北大のキャンパスで平然と赤化鎖国を説く学生たちの頭の中身を、竹之内は本気で見てみたいと感じる。

「そうか。ソ連軍が上陸するとすれば、まさにここか」

「ここだ」

「関係があるのかどうかは知らねえが、」

本山はシートに深く腰かけた。

「赤いなんとかのシンパが、新港建設労働者の団体様にまぎれてる
って噂だぜ」

「本当か」

「おそらくは」

「たぶん、おそらくで記事が書けるのか」

「いまは書きちゃいないさ」

「飛ばしか、ガセか」

「ネタの信憑性は高い。出所は訊くな。訊かれても言えねえが」

竹之内はセブンスターを抜いた。

「一本くらいは許してやる」

何も答えず、喫った。

「ヤクザと手を結んでるって、そういう話はねえんだろうな」

「思想が違う。ヤクザは金が目的だが、赤いなんたらは金は手段だ。
奴らは本気で北海道をソ連の属国にしようと考えてる節がある」

「結局千歳基地の話はどうなんだ」

「空軍内部にシンパがいるんだ。間違いない。そうでなけりゃ、い
くら軍民共用空港だつっても、最前線の空軍基地だぞ。そうそう
外部の人間が持ち出しをできるわけがない」

「61戦の整備情報と、パイロット、機体のローテーション、その
他詳細だったそうだな」

「そうだな、と言われても、そればかりはお前の方が正しい情報
を持ってるはずだ」

「表だって動けねえ。お前らの方が案外詳しい物を持ってるかも知
れん」

「千歳の第二戦闘航空団は、ふたつある飛行隊のうちの片方の隊長
が代わったぞ」

「いつだ」

「数日前」

「異動の時期でもないだろう」

「引責だな。どう見ても」

「新報は書くのか」

「もうこのネタは腐ってる。時期が過ぎてるってことだ。ようするに新報は書く気がないってことさ」

「記者連中は知ってる？」

「もちろん知ってるさ。俺が知ってるんだから」

「なぜ紙面にしなかった？」

「懇願されたんじゃないか？ お上にだ」

「それでもお前らのところは書くだろう」

「ネタがやばすぎるんだよ。それくらい深刻だ。持ち出されたのは、戦闘機の写真や諸元表じゃない。機体やパイロットのローテーション、運用に関わる軍事機密だ。軍機保護法にかかれば、一撃で軍を追われる」

「引責で異動程度ってのはどういうことだ」

「……正規ルートで裁けねえってことだ」

「それは？」

「やばすぎるのさ。軍機保護法や軍法で飛行隊長や基地司令をすっ飛ばしてみる。全部知られちゃうからな。そうすれば、何が盗まれて、どうなったのか、全部しゃべらなきゃなくなる。その方がやばい」

「だから報道もされないのか」

「そういつこった」

「本当に『赤い鳥』か」

「間違いない。『赤い鳥』だ」

「動いたのはどこかわかるか」

「直系だな。書記長の小山内の直属って話だ」

「北海道協力同義所の第三班だな」

「そこまでは知らねえが」

「そういうことにしといてやる」

竹之内はエンジンをかけた。

「で、」

本山が訊く。

「連中、戦闘機の情報なんてどうするつもりだったのかね」

「よく食い止めたと思う。……ここは石狩だな」

「ああ」

「これから新しい港ができる」

「そうだな」

「ソ連軍はここに上陸するかもしれない」

「戦争になればな」

「戦争は起こらない」

「そう思うか」

「国家間での大戦争はもうない」

「なぜだ」

「次の戦争は総力戦になる。どちらか一方が完全な勝者になるとは
思えない」

「で、」

「ここは港になる。ヤクザも集まれば、船も集まる。日本海の下
うはソ連だ」

「そうだな」

「ソ連の船も入港できるようになるな」

「正規ルートならな」

「正規も裏も関係ねえ。船は港に入るもんだ」

「ああ」

「ここを拠点にする気なのかもしれねえ」

「竹之内、」

「なんだ」

「『赤い鳥』だけじゃねえ」

本山はドアを開けた。

「送っていく」

「目立つ。歩いていく。……留萌はひどいぞ。ソ連の船がバンバン入港して、港はロシア人だらけだ。大泊よりひどい」

「そうか」

「お前から一番人気は『赤い鳥』か。『新世界革命機構』はどうだ」

「あれは、学生自治会が基幹になって、平均年齢も若い。検挙者も少ないから、あれは大学のサークルレベルってことになってる」

「物騒なもんだな」

「協力者はいるが」

「お前のか」

「俺じゃない」

「IACO」

「……本山」

「知ってるか」

「実態がつかめん」

「是永教授に心酔してる連中が所属してるそうだ」

「規模もわからん」

「気をつけるこつた。石狩新港に集まろうとしているのは、『赤い鳥』だけじゃないようだ」

言って、本山はわざとらしく咳をして、車を降りた。

そして、振り向くことなく、電柱が並ぶ草原の中の一歩道を、早足で消えていった。

静かになった。

カローラのエンジン音だけが、鳥のさえずりに混じって聞こえていた。

第三恭順区。

その区画はそう呼ばれていた。

野崎はゆつくりと、ことさらゆつくりと、「会館」まで続く、じめじめとした日陰の通路を歩く。もちろん、肩から提げたカバンには、トカレフTT-33が入れられたままだ。

第三恭順区は、「赤い鳥」が主管となって運営している、いわば「解放区」だった。ここは学生自治会や官憲の手が及ばない、学内における治外法権で、一部の学生たちはサングチュアリとも呼んだが、東京から来た派遣部隊の連中は「解放区」、「赤い鳥」のメンバーは例外なく「恭順区」と呼んだ。

……なにを恭順させるんだ。

野崎はその感覚が理解できない。しょせんは学生同士の「遊び」に思えた。それでも彼らの組織と手を切らないのは、動員数を当てにしていることだ。なにかを動かすとき、それは大人数であるに越したことはない。駅前通を三人でデモ行進しても、警察はおろかノンポリの通行人ですら気付かないだろうが、三〇人ならどうか。三百人なら過ぎゆく人々は立ち止まるだろうか。三千人なら、道警は真駒内から機動隊を呼ぶだろう。三万人なら……陸軍の治安出動が真剣に検討されるに違いない。

何かをするのに、力が必要なんだ。

だから、明日の生活も保障され、得てして実家は富裕層が多いというこの大学の学生たちの間抜け面を見ても、なんとか苛立ちを抑えられるのだ。

「けど、」

神南の声が蘇ってくる。中島公園近くの、簡易宿泊所に毛が生えたような宿の一室で、野崎の右腕に細い首を載せて、神南は言った。野崎が自分のアパートに彼女を呼ばなかったのは、……最後の意地

だったのかもしれない。自分の世界、領域、そこはまだ守る必要がある。すべての鍵をはずす必要はないからだ。

「テルの実家も、お金持ちなんですよ」

野崎の実家は、金に困っているわけではない。野崎自身も金に困っているわけではない。だからといって、一円たりとも無駄に金を使う気にはならない。両親が空を睨みながら、大地と口げんかでもするように、しかし収穫期にはどこにいるのかもわからない「畑の神様」に感謝の言葉を捧げながら、そうして稼いだ金だ。コーヒー一杯、煙草一本でも、無駄にする気はなかった。

「金には困っていないと思う」

安っぽい布団を肩までかぶり、野崎は呟くように言った。

「だったらテル、どうしてアルバイトまでしてるの？ 休みの日、あるの？」

大きな目をくりりと野崎に向けて、甘えるように言う神南の表情は、「新世界革命機構」に所属する活動家にはとうてい見えなかった。こっそり野崎は胸の裡で思う。君は、組織からさっさと抜けてデパートの売り子にでもなって、その笑顔を存分に売りさばいたらいい。日本がこの先どこへ向かうのか、北海道が大国のエゴにまみれてどうなるのか、そうしたことなど一切心配せず、映画を観たり、ラジオを聞いたり、四季を思うがままに感じ、感嘆してくれればいいのだ、と。そして、おそらくは彼女にとって、組織の活動など、クラブ活動の延長なのだろう。腕に伝わる神南の体温を感じながら、確信的にそう思った。

「俺がこの『仕事』をしていること、父さんも母さんも知らない。だから、活動費は自分でまかなわなきゃならないのさ」

「律儀」

「神南の実家も、金に困つてとは思えないが」

神南の実家は、円山にある中堅どころの洋菓子店を営んでいるのだ。伏見や宮の森に住むお金持ちを相手にした商売を手堅く続けている。神南はその一人娘。

「困ってないわ」

「なら、」

そつと神南の首を支えていた右腕を抜く。

「こんなバカげた活動、もうやめるんだな」

「どうして？」

「向いてない。君には」

「なぜそう思うの？」

「じゃあ、」

神南に向き直る。甘い匂いがして、身体の奥底がまたうずく。

「君は、この国をどうしたいと思うんだ？」

「戦争が出来ない国に」

「なぜ」

「戦争はよくないことだから」

「なぜよくない」

「人が死ぬ」

「交通事故でも、病気でも、人は死ぬ」

「望まない死だから。理不尽な死だから」

「交通事故も、公害病で死ぬ人も、死にたいと望んだわけじゃない」

「人を殺すのは、よくないことでしょ」

「当たり前だ」

「それが戦争でしょ」

「……君はナイーブすぎる。そんな小学生レベルの理由なんてどうでもいい。それに、」

「なあに」

「本当に赤化革命を起こしたら、戦争がなくなると信じているのか」

「革命がそのまま平和につながるなんて思っていないわ。でも、私たちの憲法草案には、『戦争放棄』の条文があるわ」

「だったら言うが、いまの帝国憲法にも、侵略戦争を率先して行うとか、軍国主義的な条文なんてひとつもない」

「でも、インドシナ半島で日本は戦争をしたわ」

「独立支援だ」

「ソ連が戦争を停めようとしたのに」

「違う」

インドシナ半島が欧州宗主国からの独立を宣言し、そのままコミンテルン系の組織が流入、赤化革命が起こりそうになったとき、南方資源の利権を守りたい日本は、そこに軍事介入をした。一九四〇年代から日本はインドシナ半島の石油、天然ゴム関連の利権をこっそり保有していたが、彼の国々が赤化革命してしまえば、そうして血と汗で手に入れた油田やプランテーション、鉱山や港湾が、国有財産化されてしまう。

「ソ連も利権が欲しかったただけだ。本当に戦争反対を叫んで戦争を停めようとするお人好しなんて、この地球のどこにいないのさ」

「でも、あんな遠くの国の戦争に、日本が加担する必要なんてなかったはずよ。それに、」

神南はかぶっていた布団を少しはだけさせた。部屋の温度が少し暑い。スチームが入っているようだ。季節が巡りつつあるというのに、ここの暖房管理はややずさんなようだ。

「それに？」

「軍隊を送り込んで、あんな泥沼の戦争をする必要なんてなかったと思う」

「神南、」

「なによ」

「胸が見える」

言っと、神南はあわてて布団をかぶり、野崎の胸に頬を当てた。

「神南、」

「なによ」

「君らの論理は破綻してる。矛盾なんてモンじゃない。破綻だ」

「どこがよ」

「結局、赤化革命したところで、中央集権の強力な独裁政権ができるだけだ。そうした強力な官僚機構が統制しなければ、共産主義っ

てのはうまくいかないらしいからな」

「ソ連の外交官が日本に来て、『日本は理想的な社会主義国家だ』
って言ったとかって」

「比喻だよ。確かに、そういう一面はあるかも知れないけど。俺も君もお金には困ってない。札幌には乞食もほとんどいない。もつとも、札幌で乞食をやったら冬に凍死だけだ」

「東京に行ったとき、上野や隅田川のあたりに、乞食がたくさんいたわ。あれって、東京の資本家たちが搾取した結果でしょ。資本家が集めた富は再分配されるべきなのよ」

「再分配してるさ。君も俺も、健康保険証を持つてるじゃないか。日本の所得税は累進課税だ。これって立派な富の再分配だよ。銀行も企業も政府が手厚く保護してる。保護しすぎて、北海道の人間は努力しなさ過ぎるけど。拓銀に行ってみたかい？ サラリーマンが家を建てようとして拓銀からお金を借りるのは、嫌味のひとつも我慢しないと難しいんだそうだぜ。サラリーマンならまだいいさ、」

野崎はそつと神南の肩を引き寄せた。三六度の温もりが、妙な気分させる。

「君とこのお店は、きつと拓銀からお金を借りてんだろうな。でも君とこなら、銀行の融資担当もホイホイお金を貸してくれるんだろっさ。なにせ円山の一等地に店があるんだから。お客は医者や社長さんばかりだ。でも、俺の親戚が北二四条で家具屋をやってるけど、拓銀は金を貸してくれなかったそうさ。仕方なく、北洋相互銀行に土下座しに行つて、金を借りたんだって」

「何が言いたいのよ。テルの言いたいことだつて支離滅裂だわ」

「日本は考えたら、もう十分官僚機構が強力な権力を持つて中央にあつて、ほとんど一党独裁の政治形態だし、けど自由経済で言論もある程度は保証されてて。いい国じゃないか。赤くはないが、理想的な国家だ。一億人の国民は、みんな中流階級だよ。この国に階級闘争など必要ない。なぜなら、階級そのものが存在しないからだ。違うか？ だったらなぜ革命が必要だと思ふんだ？」

「だから、戦争をしないためよ」

「インドシナ半島以外で、日本はどことも戦争してないぜ」

「ベトナムの人たちをたくさん殺したわ」

「日本軍だって被害を受けたさ。何千人も戦死してる」

「世界最大の戦艦が、艦砲射撃をしたんでしょ」

「上陸支援だよ」

「中島飛行機の爆撃機が、無差別攻撃したんでしょ」

「軍事目標しか攻撃していないさ」

「戦争してるじゃない」

「じゃあ、ソ連が北海道に攻めてきたらどうするんだ。赤い旗持って歓迎しに行くのか。それともお得意の話し合いで解決するのか。」

そんな虫のいい話はないぜ。『新世界革命機構』は、『赤い鳥』ほどじゃないが、じゅうぶん暴力革命願望が強いからな。日本軍の武器は侵略兵器で、ソ連軍の武器は解放の道具だとか、そういうのを詭弁って言うんだ」

「テル、」

「なに？」

「テルは、何が目的で活動してるの？」

「このあいだ言ったじゃないか。北海道の独立だ」

「それって、」

神南が半身を起こした。半裸のまま、ぼんやりとした灯りの中で、眠そうな目のままで、野崎を見下ろす。

「私たちの活動と、どう違うの？」

「日本は今のままでいい。東京に権力が集中し、地方をないがしろにし続ければいい。けど、北海道は違う。日本から独立させる」

「なんのために？」

「この停滞しきつた北海道の人間の、道民の目を覚まさせるためさ」

「目が、覚めていないの？」

「覚めていないよ。ぜんぜんね」

「本気で、考えてるの？」

「本気さ」

真正面から野崎は神南の瞳を射貫く。

神南は、合わせた視線をそっと外して、ゆっくりと目を閉じた。
甘い匂いがした。

神南が、野崎の上半身にもたれかかってきた。

甘い、匂いが、する。

築堤の上の線路を、長大なセキを牽いたD51が、盛大に黒煙を巻き上げて走っていく。竹之内は国道三六号を苦小牧から千歳に向かう。

もともとは海軍の飛行場として拓けた町だ。やがて敷地は陸軍航空隊から発展した空軍に移管され、北日本最大の航空基地としていまも発展を続けている。北海道ならではの広大な敷地は、裏を返せば、樽前山噴火の火山灰が一面に積もったこのあたりは畑作にも適さず、ただ広いだけの土地は遊ぶだけで、太平洋に面した苦小牧からはやや遠く、自治体はそのただっ広い大地を滑走路にし、国内最大級の空港と空軍基地を誘致し、いまや千歳の街は、その人口の三分の一が軍関係者という状況になっている。

札幌から離れるにつれ、心なしが気温が上がっていくような気がした。太平洋から吹き込む風だろうか。しかし、本来胆振地方は冷涼な気候だ。真夏でも三〇度を超える日などほとんどない。そのかわり真冬も、気温だけはそれなりに下がるが、日本海に面した札幌ほどに積雪は多くなく、航空機の離着陸に向いていないこともない地域と言えた。いまではすっかり、北海道の玄関口の座を、函館から奪い取った形だ。

千歳には、空軍基地のほか、陸軍も駐屯する。その陸軍も国内有数の規模だ。第七師団。かつて第七師団と云えば旭川を本拠地として、北鎮の任に就き、日露戦争ではその勇猛さを旅順攻略で轟かせたという。もちろん多大な犠牲の上にだ。軍の再編で第七師団は旭川から千歳に移った。旭川にはいま第二師団が置かれている。千歳に改変された第七師団は、国内唯一の機甲師団として編成されている。それも、極東ソ連軍が南樺太、そして北海道に攻め込んでくるかもしれないという、なかば妄想じみた危機感によるものだ。

竹之内は思う。

仮に極東ソ連軍が動いたとして、ここから南樺太は遠すぎる。日本はアメリカと違い、大型の戦略輸送機を持っていない。一九五〇年代までは違った。東南アジア諸国へ、日本は戦力を迅速に投射する必要があった。中島が大型輸送機を設計し、陸軍の兵士たちを乗せてインドシナ半島や大陸へ向かった。けれどそれも過去の話だ。当時の地上戦力は歩兵が主力であり、日本はその点でもずいぶんと機械化が遅れ、戦車や装甲車と云った武装は、冷戦の一方の主役、ドイツに遠く及ばない。そして現代の重武装化された車両は、もはや中島や川崎が世に送りだしている戦術輸送機では文字通り荷が重すぎる。結局、海軍の輸送艦に頼るしかない。しかし、北海道に軍港はない。それが如実に物語っているではないか。

今どき戦車部隊を鉄道輸送する気か。しかも宗谷海峡をどうやって越える。もちろん南樺太にも陸軍部隊はいる。戦闘機と、精鋭揃いの地上部隊。彼らがいるから、ソ連側も北緯五十度線から南を越えることなどできない。社会党や共産党が何を言おうが、最終的に外交で頼れるものは「力」だけなのだ。竹之内は千歳の陸軍部隊でそれを思い知っている。力の前に言葉は無力であり、飛来する砲弾の前に情は役に立たない。「撃つな！」と懇願する前に、引き金を引く相手の命を奪うしかない。それが生きると云うことだ。

竹之内はカローラを国道から市道に入れた。千歳の街は、北海道の典型的な田舎町だ。ちよつと市街地を離れば牧場が点在し、さもなければ湿地帯や、手つかずの原野だ。

空港の街とはいえ、まだ庶民は気軽にロッキードや中島の旅客機に乗ることはできない。いくら乗客の数の上で、千歳が北海道の玄関口になったとはいえ、それは一刻の時間すら惜しむビジネスマンたちが、こぞって飛行機を使い始めたからで、竹之内も私用で東京へ行くこうと思えば、日本航空でチケットを買うより、札幌駅に向かって列車の切符を買うのだ。札幌からは「北斗」、函館から青函連絡船、青森からは上野行きの「はつかり」に乗り換え、うんざりするくらい車窓を楽しみながら、上野に着いたころは、すっかり両足

がへろへろになっている。

約束の時間まで、まだ三十分ほど。まず札幌を出るのに、相当時間をかけた。寄りたくもないラーメン屋でチャーハンを食べ、雑貨店でアンパンを買い、道路脇で丘を望みながら煙草を喫い、千歳に入ってから、いったん市街地を抜けてウトナイ湖の手前まで行き、唐突に引き返してここに着いた。尾行対策だ。この程度のクリーニングで捲けるものかどうかはわからないが、仮に「素人」がついていたのなら、竹之内でも気付くはずで、あるいは「素人」ならば、輪厚のあたりで失尾したはずだ。国道を逸れ、クランク博士が農学校の学生たちに見送られたという沢まで、やたらと狭い農道をカローラで走りまわったからだ。

もともと竹之内はそうした情報系の人間ではない。諜報を学んだわけでもない。頭で考えるより、力に訴えるタイプだ。学生時代は柔道でならした。素手でも、相手が飛び道具を持っていないければ、二、三人まとめて締め上げる自信がある。一対一なら負ける気がしない。ついたあだ名はありがたくもない、「考える筋肉」。ただし、職業軍人は別だ。彼らは、相手を倒すための技術ではなく、相手を殺すための技術を持っている。小銃や拳銃の技術に秀でる以上、それらの武器をなくしたときに、頼れるのは自分の身体だけだ。だからこそ、竹之内は職業軍人と事を構える気がしなかった。千歳の部隊で学んだことだ。竹之内は警察系の人間であり、軍隊系の人間ではなかった。真駒内出身でも。

エンジンを止めたカローラの車内はやや寒かった。今日は曇り空。遠くの恵庭岳が霞んでいる。おそらく雨だ。窓を薄く開けてセブンスターに火を点けた。まだ雨滴は落ちていないが、空は一面濃い灰色。いつ降り出してもおかしくない。

爆音。

空軍の六一式戦闘機だ。双発のターボジェットエンジンを装備した中型機。すでに空軍は後継機の開発に入っているという。戦闘機は翼端からヴェイパーを曳いて、あっという間に消えた。雲底が低

いのだ。やはり降りそうだ。竹之内はセブンスターを深く喫い、そしてシートにもたれ込んだ。札幌を出る前に食べたチャーハンが胃の中で渦巻いている。唐突に立ちよった店で、決して旨いチャーハンではなかった。貴重な一食、これで損をした。

やがて、三本目のセブンスターに火を点けたころ、通りの角を曲がって、鳥打ち帽を目深にかぶり、薄手のコートを纏った男が現れた。竹之内は腰のホルスターに手をやる。M1911A1がしつかりとそこにある。初弾はすでに薬室に送り込んであり、撃鉄を起こした状態でセイフティをかけてある。抜いて引き金を引けば、発砲できる。だが、ギリギリまでは抜かない。竹之内はまだ現場で発砲したことはない。訓練でなら、すでに五桁に迫る弾薬を消費しているだろうが。頼るのはいいが、過信はいけない。それは竹之内自身の肉体にも云えた。

「タケダさんか」

鳥打ち帽の男が言った。まだ声は若い。精一杯年増を装っても、見える首筋はつややかで若い。電話で声だけは知っていたが、本人はさらに若い。

「コヤノ……さんだな。入ってくれ」

竹之内はカローラの助手席ドアを開けた。

「こんな真つ昼間から>時計台<さんが来るとは思わなかった」

時計台。内務第二課……国家公安機構内務第二課のことを>時計台<と呼ぶ。竹之内は腰のM1911を意識しないわけには行かなくなつた。そして、彼を自分の私物であるカローラに乗せたことも後悔した。内2の作業車で来ればよかった。本気で思ったが、内2の車両をこの男に見せるのはさらに考え物だつた。登録ナンバーや車種と云つた情報が彼らに流れる。一台とはいえ、防げるものは防ぐ。けつきよく私有車で来たのは正解だつたのだ。

「あんだこそ、こんな平日の真つ昼間からよかったのか」

「今日は明け番なんだ。大丈夫さ」

二四時間の当直勤務が明けたばかりとは思えない程、男は明るい

顔をしていた。眼が澄んでいる。まるでパイロットのように。

「古矢野……伍長だったよな」

「タケダさんは、警部補でしたか」

「そういうことにしておいてくれ」

「じゃあ、俺の方も」

「古矢野さん。あんたの基地での立ち位置はすっかりわかってるんだ。余計なおしゃべりはいいい」

竹之内が語調を強めると、古矢野はやや肩をすくめて見せた。欧米人がするように。その仕草が竹之内のかんに障る。作業でなければこんな男と会ったりはしない。

「>時計台くさんがわざわざ来てくれるとはね」

内2の札幌分局は、旧札幌農学校演武場……札幌時計台を見下ろすビルに入っている。だから、「彼ら」は内2を>時計台と呼ぶ。

「話は本当か」

竹之内は、できるだけ感情を抑えて言った。

「本当です」

古矢野は竹之内の言葉を茶化したり料理せず、そのまま答えた。竹之内はまっすぐ前を向いたまま、気持ちだけを古矢野に向けた。ほんのわずかだけ、古矢野に抱いた嫌悪がゆるんだ。

「どこまで本当だ」

「全部です」

「全部」

「ええ。全部」

「どういうことだ」

「ようするに、」

古矢野も前を向いたまま。顔を隠すように烏打ち帽をかぶり直した。

「煙草喫つても構わないですか」

「構わんよ」

古矢野はポケットからラッキーストライクを取り出した。こんな

ところまで、アメリカナイズの波が押し寄せていると云うことだ。

古矢野の所属する組織は、近年アメリカとの結びつきが強い。

「ようするに、本当に全部なんですよ」

「どこまでだ」

「機体のローテーション。いつIRAN入りするか、パイロットのシフト表、エンジンの予備、人事考課」

「まさか」

「本当です」

「どうやってだ」

「だから、>時計台くさんが血相変えて調べてるんでしょう」

竹之内はセブンスターを喫いたい衝動に駆られたが、よしだ。煙草を喫っているあいだ、拳銃を抜きづらくなる。

「タケダさん」

竹之内は顔を向けずに返事をする。

「右手、いい加減、鉄砲から離して下さいよ」

「それは無理だな」

「でもいま俺がナイフであんたに襲いかかったら、鉄砲なんて抜く暇もないでしょう」

「勝てると思うのか」

初めて顔を向けた。

そして、じつと見た。射るように。

「冗談です」

古矢野はラッキーストライクを喫い終わり、窓から吸い殻を捨てた。

「一言だけ言え」

「なんですか」

「『赤い鳥』か」

竹之内はじつと古矢野の目を見据えた。澄んだ眼だった。それは変わらない。

「そうです」

「他の団体は」

「動いているようですが、いまのところ表立っているのは『赤い鳥』だけです」

「なぜ2空（第二航空団）なんだ」

「北海道だからですよ」

「近い？」

「まあ、そんなところですね」

海の間こうは、赤い国だ。赤い星と鎌とハンマーの国。

「連中はその情報を、赤い星に売るのか」

「違いますね」

「違う？」

「そんな単純だったら、あなただってここへは来ないでしょう」

古矢野は二本目のラッキーストライクだ。

「だいたい、そうだったら、>時計台<が動くわけがない。別な部署でしょ、そういうときは」

「MPは動いてないのか」

「うまくやってるんですよ。『うまく』ね」

その口調に、竹之内は初めてM1911から右手を離した。

「そんな奥まで巣くつてるといのか」

「その可能性があると思います」

「『赤い鳥』だけか」

「いろいろぶら下がってるみたいです」

「ひとつだけ、宿題にしてもらえないか」

「なんですか」

「『新世界革命機構』という組織は知っているか」

「名前は。たぶん、『赤い鳥』にじゃらじゃらぶら下がってる団体のひとつですね」

「構成員はいるか」

「ウチにですか？ それはなんとも」

嘘は言っていない。竹之内はわかった。この古矢野は口調は軽い

が、回りくどい嘘もまやかもしない。前任者もそう言っていた。

「調べられるか」

「その『新世界革命機構』ですか？」

「そうだ」

「調べられます」

「感づかれずにか」

「当り前です」

「頼んだ」

竹之内はそう言うと、内ポケットから封筒を抜き、古矢野を向くことなく、彼の膝に放った。

「助かります」

中身を検めることもなく、古矢野は封筒をコートのポケットにしまう。

「俺のじゃないが」

「>時計台くのだ。まあ感謝してますよ」

「宿題が満点なら、倍出す」

「期待してますよ」

それだけ言うと、古矢野はあっけなくカローラを降り、あいさつも振り返りもせず、来たときと同じように、軽やかに通りの角を曲がっていった。

五分。

五分待ち、竹之内はエンジンをかける。

さらに三分。

クラッチペダルを踏み込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4724z/>

虹色スクランブル

2011年12月15日23時46分発行